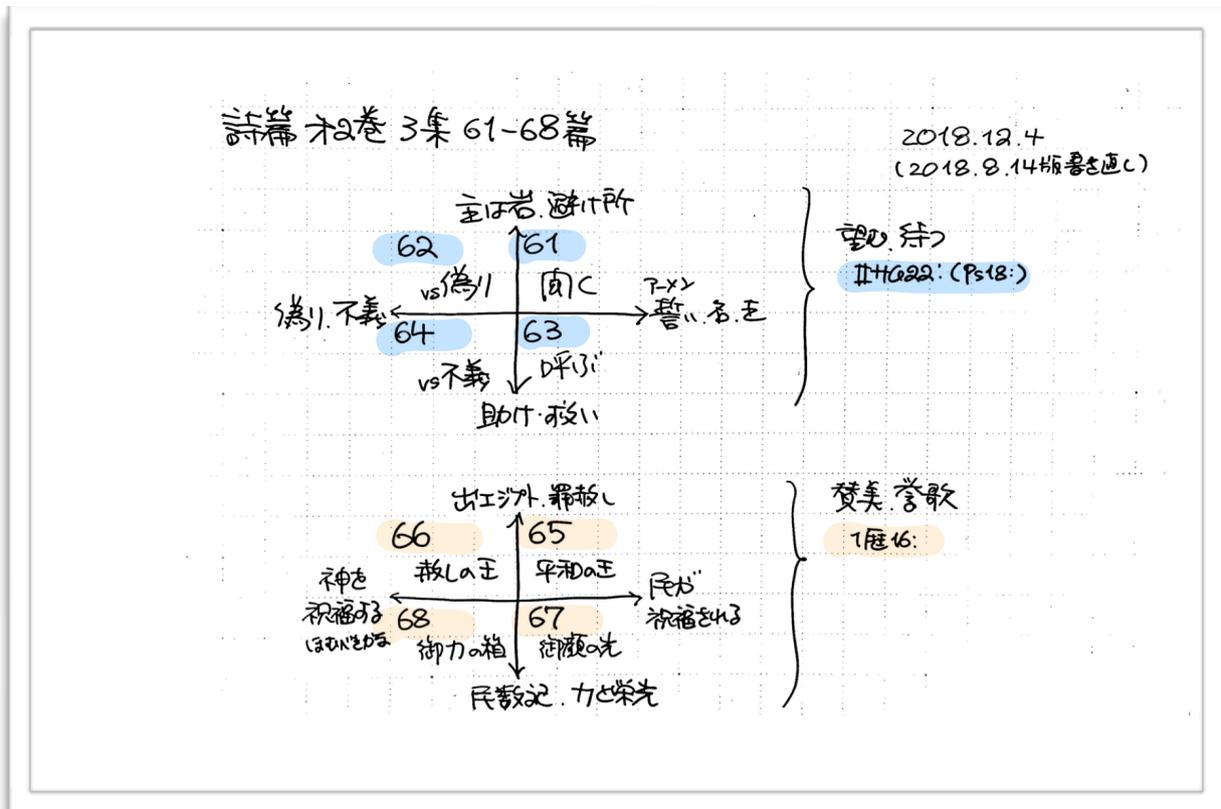




## 詩篇第2巻

## 詩篇61-68篇の配列構造



詩篇第2巻の真ん中の部分です。49篇から68篇のこちらの部分です。61篇からと65篇から。

61篇からのところは、特に第2サムエル記22章の詩篇18篇が中心に思い出される「安息に入る」という(十戒の)第4番目の命令です。避けどころ、安息に入ってその日を聖とせよということです。

65篇から68篇は、主の御名をほめたたえる、主はほむべきかなという第1歴代誌16章、こちらが大きな中心的なテーマかなと。どちらも主の家に住むというダビデの契約の約束です。その約束を表している詩篇集だと思います。

61篇から64篇のところは、安息に入ることを待ち望むという、救われた日に歌った歌というような18篇のことを思い出すということです。救い出される、聖所に導かれるというのは、出エジプト記の15章でも言われているところです。

61篇と62篇は、主は岩である、揺るがないやぐらであるこの主に信頼して、主は岩ですということに身を避けるということと、63篇と64篇は、その神様は穴から救ってくれる、死からすくってくれる、滅びないように救い出してくれるというのが、63篇と64篇の並行です。61篇と63篇に共通しているのが、誓いです。主の名、誓い、王である。その主の名に誓うということと、62篇と64篇は、偽り(62)、企み・だます(64)という攻撃から守られてということになりますけど、こちら(61,63)は誓いですから、アーメン・

真実。こちら(62,64)は偽りという戦いをして、安息について教えているというのがこの段落です。

一方、65篇から68篇は、第1歴代誌16章、契約の箱がダビデの幕屋に入ってくるというところを思い出します。

65篇の7節、13節、66篇の出だしのところが、96篇、つまり第1歴代誌16章のところに似ています。67篇の出だしは、民数記6章の祝祷のところ、大祭司の祝祷を引用している。68篇の出だしのところは、民数記10章の契約の箱に立ち上がってください、そして敵を散らして戦いに出てくださいというときの「主よ立ち上がってください」契約の箱が移動するときの出だしの言い方。これが、68篇の出だしで引用されています。

この4つ(65,66,67,68)とも、救われて約束の地に入れられているという勝利があらわされている出来事を記念して歌っているということだと思いますけれど、65篇と66篇は、どちらかという、連れ出された、罪が赦されるという話もあります。連れ出されて、海のとどろき、大波のとどろきから連れ出される、ここには(66)海を変えてかわいた地とされて川を渡ったということが直接ありますけれど、出エジプト記的な連想がありません。

67篇、68篇の出だしは民数記を引用していますので、民数記の荒野での導きを連想するように編集されているのだろうと。民数記の中で教えられていることが、96篇の第1歴代誌16章で言われている栄光と力を主に帰する、67篇は、栄光、御顔の光を照らしてください。68篇のほうは、契約の箱の話です。契約の御力。力を神に帰せよということがありますけれど、聖所に入ってくる、聖所の中心である御力の箱についての賛美というのが68篇ということで、全体として、第1歴代誌16章を思い出さすということなのです。

上(65,66)出エジプト記的、67篇と68篇が民数記的。65篇と67篇は、民が祝福される。それに対して66篇、68篇は、神を祝福する。捧げ物をしたりしていますから。神はほむべきかな。神はほむべきかな。神を祝福するのと(68)、民が祝福される(66)という並行で、主の御名をあがめるということがあらわされているのだと思いますので、十戒の3番目(65-68)、十戒の4番目(61-64)という段落の構成になっていて、その前の49篇からのところが、十戒の1番目、55篇からのところが、十戒の2番目ということで、この4つを通してダビデの道を歩むということを教えているのだろうと思います。

